

機械姦×調教

- ♡喘ぎ、濁点喘ぎ
- 衆人環視・レイプ
- 搾精・尿道攻め
- 潮吹き・媚薬
- 乳首攻め・トリルバイブ
- アクメビーム

無機質なタイル張りの真っ白な部屋。その中心には分娩台のような大型の仰々しい椅子が鎮座していた。

だが、ただの椅子でないことは、椅子の背後に設置された、計測器をはじめとする普通に生活しているだけではお目にかからないような装置や道具の数々、そして背もたれ側の壁に設置された巨大モニターが示している。

そんな異様ともいえる部屋の中、複数人の男に取り押さえられながら連れてこられた人間が一人いた。ミディアムショートが特徴の黒い髪を持つ青年—壮太（そうた）は、何とかこの場から逃れようとやたらめったら暴れ、暴言を吐き捨て続ける。

「は、放せっ！こんなの聞いてない！お、俺は新製品のテストのバイトに来ただけだっ！なのに、なんでこんな手術着を着せられてっ、変なところに連れてこられなきゃいけないんだよ！」

大声で喚き散らしても、白衣の男たちの行動は変わらないし、複数人相手に抵抗なんて叶うわけもない。

あっという間に両手両足をアームレストとフットレストにそれぞれ鉄の枷で固定されてしまう。ぴっちりと股を閉じる形で拘束されているせいで窮屈で仕方ない。

こんなの人権侵害もいいところだ。

「おい！聞いてんのか！？犯罪だし、訴えてやるからなっ！」

すごむものの、周りを取り囲んでいる男たちはにたにたと笑うばかりだ。

「はいはい。好きにしろよ」

「ま、ここから出られたらだけどな」

「そもそも契約書にサインしちゃったんだろ？全て同意しますって。ちゃんと肉便器に調教するって書いてあったのに。馬鹿だなあ、ちゃんと読まないなんて」

薄ら笑いを浮かべながら口々に好き勝手言いつつ、男たちは装置の確認を進めていく。

明らかに慣れた様子に、手つきに、壮太が心底怯え始めたころ、男の一人が口を開いた。

「さて、準備完了だ」

一人の男が装置の操作パネルの前に移動し、もう一人が桃色の液体の入ったシリンジを手に壮太に近づいてくる。

明らかにまともな薬ではないとひと目でわかるそれに、壮太は一瞬で青ざめる。しかし、四肢を拘束された壮太にできる抵抗は罵るか身を振ることのみ。

そして手の空いた男たちはそれすら許さず、手で口を塞いだり、身を振って暴れないように肩や腕までもを押さえつけてきた。

「針が折れてもいいのか？体の中に残ったら面倒なことになるぞ？ん？」

「ッ……」

直球で脅され、壮太は反射的に全身を強張らせ、大人しくなる。血管に針が残れば最悪死ぬ。死にたいわけもなく、大人しくなった壮太の首筋に一切の慈悲なく針が刺さった。

ちくりと小さな痛みを感じたと思えば、どくどくとナカに薬液が注入される嫌な感覚。

いったい何の薬なんだ？というか自分はこれからどうなるんだ？不安で胸がいっぱいになり、心臓がぼくぼくと嫌な音を立てる。

.....いや、それだけではない。

どくんっ♡どくんっ♡どくんっ♡♡♡

「あ、え.....？な、んだ、これっ.....」

髪の毛の生え際から汗が噴き出し、心臓が爆発でもするのかと思うくらい好き勝手に跳ね始めた。

全身が熱い。いったい何が起こった？人間爆弾にでもされたのか？なんてありえない荒唐無稽な考えが脳裏に浮かぶ。

「流石即効性。ああ、これは新しく開発されたテスト段階の媚薬だね。君は今から立派な商品……いや、肉便器になってもらう」

そう言って、男はパネルを操作する。するとヴィィイイといかにもそれっぽい駆動音とともに、フットレストがぱかりと大きく開いてしまった。

壮太が着ているのは手術着だけ。そう、ようするに下着を一切つけていないのだ。おかげで若い雄やアナルまでもが丸見えにされている。

しかも、股にぶら下がったいちもつは……あろうことか芯を持ち始めていた。

「おお、若いっていいね」

「薬の効果は良好、と」

「見るなっあっ……！やめろ、肉便器なんて嫌だっ！解放しろっ、んうひ！？」

こんなみっともないところを見られたくない。隠したい。
だが、今の壮太が動かせるのは指先くらいのものだった。

そんな涙目で震える壮太に一本の、先端が霧吹き状になっているアームが忍び寄ってくる。なんだ今度は。警戒し、睨んだのもつかの間、壮太に向かって、びゅるびゅると粘度の高い液体を吐きかけてきた。

「あふっ！？つめ、たっ……！？」

胸、腹、太もも、股……全身に無色透明な液体が降り注ぐ。手術着も触れた個所は色が変わり、肌にへばりつき気持ちが悪い。無機質な冷たさに身をすくませる壮太を見ながら、男の一人が口を開く。

「どろっどろの若い男の子、いいねえ、そそるよ……。ローション準備よし。次の段階に入る」

「ちなみにそれにも興奮する成分が含まれてるから楽しんでね」

「うれしくな、っあ、あゝ！？♡あづ、んう、つく
ひっ！？」

ローションが触れた個所が燃えるように熱い。ちんぽもじんじん痺れて、壮太はいきなり現れた変化に目を見開いて悶える。

次の段階ってなんなんだよ。叫びたいのにまともな言葉はもう出てこなかった。心臓がどくどく早鐘を打ち、ローションまみれの全身がカッと熱くなる。ちんぽは気づけば兆す程度では済まされない、完勃起状態になっていた。

おかしい。これが媚薬？人生の中で一度だってそんなものを服用したことのない壮太は戸惑いを隠せず、周囲に視線をさ迷わせる。しかし、壮太を助けてくれるものは誰もいない。

それどころかうねうねと触手のように柔軟な動きをするアームが何本も近づいてきてしまった。

お椀型のもの、筒状のもの、細い棒のようなもの、無駄にバリエーションが豊かであり、より一層恐怖心をあおってくる。だが、いくら身をすくめたところでなんにもならない。

「んううう！？♡♡♡」

胸にカップが、ちんぽに筒ががっちりと取り付けられる。どちらも透明で、乳首もちんこも丸見えだった。特筆すべき点は、どちらも内部に透明な繊毛がびっしりと存在している点だろう。

壮太は当然知る由もないが、搾乳、搾精用の器具であり、改良に改良を重ね続けている新型の装置だった。

胸はともかくちんこなんていう繊細な部分に触れられれば、嫌でも反応をしてしまうわけであり。

濡れたちんこがぞりゅぞりゅっ♡と柔らかなブラシでひと擦りされればもうたまらなかった。

「あふ、んおっお♡こりえ、やばっ……ちんこ、とけちゃ、ううッ！？♡♡♡」

これまでの人生で得たどんな快感をも一瞬で超えてしまった。

もっとも、壮太は童貞故にセックスなんてしたことないのだけれど。

腰を引いて逃げようとするが、すぐ後ろは背もたれになっていてそれすらできない。それどころか、ぴ、と小さな音が鳴った瞬間、猛烈な勢いでブラシがうねり始めた。

「んぎい！？♡っお、あ、なにっ！？すわれ、っお、ほおゝ！？♡♡♡」

ぞりゅぞりゅぞりゅっ♡ヴィイイイ、じゅこっ♡じゅこっ♡♡♡

耳障りな音が鳴り響いたと同時に、壮太の口から困惑と喘ぎが混ざり合った声があふれ出てきた。

何故なら胸と股間に取り付けられた器具はブラシをうねらせごしごし乳首とちんこを抜きあげるだけではなく、強い力で吸引までしてきたからだ。

ただでさえ溶けてなくなりそうなほど狂おしい快感に苛まれていたところに追撃を受けてしまい、壮太は目を白黒させ、首を左右にぱたぱた振ってなんとか快感を逃そうとする。

恐ろしいのはちんこだけでなく乳首からも快感を感じてしまっていることだ。

慎ましやかな、肌の色とそう大差ない豆粒乳首は、絶え間なく繊毛ブラシでねっとり扱かれ、そのうえでじゅこじゅこ激しく吸引されていた。

「なんれっえ、おれ、おとこなのについ♡ちくび、じくじくしてっ.....ぎもち、いいゝイゝっ!?♡♡♡」

どうして?なんで?男の乳首なんて存在価値のない、ただの飾りともいえない小さなぽちでしかないはずなのに。

それなのに、ブラシで全体をねっとりと、ローションが泡立つくらい磨かれると、まるでそこがもともとから性器であったかのように、腰がびくびく勝手に連動するように跳ねた。

もちろんその間、ちんこも同時に攻められて、壮太は若い雄らしく、一瞬で上り詰めることになった。

「い、イぎゅっ♡んお、っおゝ♡とけちゃ、っあう、でる、でるでるでるうっ♡♡イツ、っぐううううううゝうゝ♡♡♡」

びゅるっ♡びゅるるっ♡♡びゅるるるるるうううう～～～
～ッ♡♡♡

纖毛がカリ首と皮の間をごしごし磨いた瞬間、あっけなく
壮太の雄から粘ついた濃ゆい精液が鈴口から噴出する。

若く量の多いザーメンは、そのまま器機に取り付けられた
チューブに吸い込まれていき、筒の中から消えて接続されて
いるタンクの底に落ちていく。装置は射精が終わった頃よう
やく停止するが、その時にはすでに壮太は虫の息になってい
た。

ちんこは透明な筒の中でびくっ♡びくんっ♡とのたうち、
乳首は真っ赤に腫れて元より一回り大きく、ぷっくりうまそ
うに腫れており、さんざんな状態である。

「びゅーびゅー射精できて偉いねえ。乳首も真っ赤になって
きてる、いいね、才能があるよ、君」

「はーっ♡は、っへえ……そんにゃ、さいのお、いらなっあ
ゝ……♡」

「ちゃんとザーメンタンクを用意してあるからね、これから
もいっぱいびゅーびゅー好きにだけ射精していいよお」

「やらあ……♡いえ、かえりたいいっ……もうやだ、やだあ
……ッ♡」

健康的な若い雄の射精を見て、白衣の男たちがぱちぱちと
拍手する。

人に見られながら、それもこんな情けない無様な、人間ど
ころか家畜のような扱いを受けて射精したところを見られる
なんて。

唯一自由な頭を左右に振りながら、壮太は涙をぽろぽろ流
しながら帰してくれと訴えた。

「何を言ってるんだ。これからが本番だぞ？」

「もう一段階ギアをあげて、それとアクメビームのテストに
入ろう」

「尻も開発しないと。拡張用バイブのテストを……」

同じ人間と会話しているはずなのに、まるで宇宙人と会話しているかのように会話のキャッチボールが成り立たない。

男たちは壮太の願いを無視してそれぞれパネルを操作したり、メモを取ったりしている。

再びピッという短い音がして、胸と股間に取り付けられている装置が再び動き出す。

「あひい！？♡んあ、また、うご、いてっえゝ！？おれ、いったばかり、なのにいいいい♡♡♡」

ヴィイイイイイツ.....こしゅ、ぐじゅるっ♡ぐしゅ、ぐじゅじゅじゅっ♡♡♡じゅこっ♡じゅぞぞぞぞおっ♡♡♡

「おっおっ♡おっほおゝ♡先っぼぞりぞりっ♡やら、やらやらやらっあゝ♡ふぎゅっ♡ちくび、ひっぱらないで、のびちゃ、っううゝ♡♡♡」

ちんぽと乳首を先ほど以上に強く搾られ、壮太は白い喉を晒して鳴き叫ぶ。

しかし今度は二点攻めでは終わらず、アームの先に銃がついた装置と、細長い棒になっている装置が近づいてきた。

銃は壮太から少し離れた位置で止まり、銃の照準はまっすぐ青年の薄い下腹部に定まっている。

「ひっ！？」

銃なんて物騒なものが視界に入り、壮太は喉の奥でくぐもった悲鳴を上げた。

まさか殺されるのか？恐怖を感じるが、全身に蔓延る熱は変わらず、とめどなく押し寄せる熱にちんぽを膨らませっぱなし。

そんな壮太を囲む男たちの一人が、それを見て面白いと言わんばかりに見下す表情を浮かべ、口を開く。

「安心しなさい。これに実弾は入っていません。殺傷能力はありませんよ」

「な、ならっあ、なんなんだ、よおっっ.....んうううう
っ、っいひ、っお、ひあっ♡」

「こう使うんです」

「——————ッ おほおゝ ！？♡♡♡」

チュンッ♡

こう使う。その言葉とともに男がスイッチを押すと、銃口からショッキングピンクの光線が壮太の下腹部に向かって放たれた。

ビームが壮太の下腹部を貫いた瞬間感じたのは、猛烈な痛み.....ではなく、脳みそが焼けるほどの快感だった。

「あ、え.....？♡♡♡」

ぷしゅっ♡ぷしゃっ♡ぷしゃしゃあっ♡♡♡

一拍遅れて、筒の中に押し込められたちんぽから精液ではない、無色透明の体液が一気に噴き出した。

状況が理解できず間拔けな声を漏らしながら、壮太は訳が分からず目の前の男たちを見つめる。

しかし、男たちから返ってきたのは言葉ではなくレーザー照射だった。

「おっ！？♡おほっ！？♡んお、っおおっおお`♡♡♡」

チュンッ♡チュンッ♡チュンッ♡

何度も何度も何度も、断続的に銃からレーザーが放たれ、壮太の下腹部をしつこく貫く。

そのたびに壮太は悶え狂いながらイき続ける羽目になった。気持ちいい。なんで気持ちいいのか、それどころか何が起こったのかもわからないまま、絶大なキャパシティオーバーの快感に脳みそをかき回される。

そして、その間に細い棒のついたアームが壮太の尻のはざま、アナルに忍び寄っていた。

「んぐおッ……っあふ、んぎ、つい！？」

「これはアクメビームと言ってね、わが社の威信をかけた新商品なんだ」

「んひゅっ♡っあ、イぎ、っぱなしで、つらい、っいゝ
ふぎゅんっ♡」

「当てただけで強制的に絶頂させられる。当て続ければほ
ら、ごらんのとおり」

「————～っおおほおゝ！？♡♡♡」

「絶頂し続けられる。ほら、すごいぞ！潮吹きが止まらな
い！」

男たちが笑う。その間もビームは断続的に壮太に照射され
続け、壮太は悲鳴を上げ続ける。

開きっぱなしで閉じられない口の端からは粘っこい涎がた
らりと垂れ落ち、身体は小刻みにガクガク震え続けていた。
止めたくても止まらない。頭は真っ白になって快感以外の五
感が全て吹き飛ばされてしまったかのよう。

しかも、媚薬で身体の感度を徹底的に高められているから
なお悪い。

「やらあっ♡しぬ、しんじゃううっ.....イぎ、じぬっ♡♡♡」
」

「大丈夫だ。死なないようにセーブしているからね。もうあと何セットか試してみよう。乳首とちんこにも照射開始！」

「んぎiiiiiiiiいゝ いゝいゝっ♡♡♡」

男の宣言とともにさらに銃口の数が増え、今現在もじゅこじゅこ機械に吸われ続けているちんぽや乳首がショッキングピンクのレーザーに貫かれる。

(気持ちいい♡気持ちよすぎて死ぬ♡こんな人間が耐えられるわけないiiiiっ♡♡♡)

もしも身体が自由だったら土下座でもしてやめてくれと懇願していたかもしれない。もはやプライドとか、彼らへの怒りとか、そういう人間的なものは一切合切保つことができなかった。

しばらくして、ようやくレーザーがやみ、うねりつつ乳首とちんぽを締め上げ、舐っていた装置が動きを止めた。

筒から解放されたちんぽは、もう出すものなんて少しもないとでも言わんばかりに、情けないふにゃチン具合を披露している。壮太も手術着を汗でぐっしょり濡らし、というかなんなら己の分泌した汗や涙、鼻水、精液と、ありとあらゆる体液に塗れて汚れていた。

「あ、あええ.....♡おり、られにゃっ.....ずっと、イッて、っえゝ.....♡♡♡」

びく、びくんっ♡

身体の震えが、否、痙攣が止まらない。舌をだらしなく垂らしたまま快感の余韻に絶頂し続ける。

ずっといじめられ続けていた乳首やちんぽは真っ赤に充血しパンパンに腫れていて、外気に触れただけでもじくじく疼いてしまう。

媚薬も抜ける気配がなく、なんならぐったりしている間に再びシリンジが首筋に刺され、薬液を注入されてしまった。

そうだ。当然これで終わりではない。